日光軒　手打ち佐野ラーメン

とちぎの力(ちから)めし

元プロ野球選手　木村昇吾さん

クリケット転向を即決

佐野から世界羽ばたく

クリケットで地域活性化を目指す佐野市で練習に汗を流す元プロ野球選手の木村昇吾さん(38)。プロ野球選手からの転向は初めてだが、「野球で培った技術や経験が生きる。僕の中で野球は消えない。新たな挑戦をする」と海外プロリーグ入りを目指して挑戦の日々を送る。佐野市内のラーメン店で、クリケットにかける思いを聞いた。

JRと東武鉄道が乗り入れる佐野駅から徒歩2分のラーメン店「日光軒」。10年前からクリケットの普及に尽力してきた店長の情熱を感じさせる店内で、自慢の「手打ち佐野ラーメン」を頼んだ。

長年プロ野球で活躍してきた選手がクリケットに転向するのは簡単な決断ではない。

「社会人野球や独立リーグから兼任コーチの打診はあったが、選手として、アスリートとして、百パーセントやっていた人間が終わっていくのではないかと思った。その時にクリケットの話をもらい、面白い、やれると思った。野球をやらないかもしれないが、野球がそのまま生きる」

横浜、広島、西武で通算15年のプロ野球生活。レギュラーに定着した時期もあったが、内外野こなせ、守備固めや代走での出場も多かった名バイプレーヤーとして知られる。昨年10月に西武から戦力外通告を受け、11月の12球団合同トライアウト後に進退を悩んでいたところ、クリケットへの誘いの電話を受け、ものの5分で決断した。即決だ。

「いろいろなことを考えていたので伏線はあった。小学校1年から30年間、僕イコール野球みたいな感じで生活し、アスリートとしてやってきた。同じような感情でできるかが一番の問題だった。体はまだまだアスリートとしてやりたい。ただ経験がない。経験を積まないといけない」

クリケットは野球と共通点が多く、未経験ながら、すぐに日本代表選手に加わった。話がひたむきな思いで熱を帯びたころ、熱々のラーメンが運ばれてきた。こしのある麺に深みのあるスープに舌鼓を打つ。クリケットの盛んなインドでは年俸30億円近くの選手もいるとか。

「お金もすごいが、熱狂している。インドは貧富の差が激しいが、クリケットは木の棒とボールさえあればできるので、路地で裸足でやっている子供もいる。ITの大富豪がチームを持って大成功しているから、みんなそこを目指す。カースト制度の中、裸足の子供がのし上がっていく」

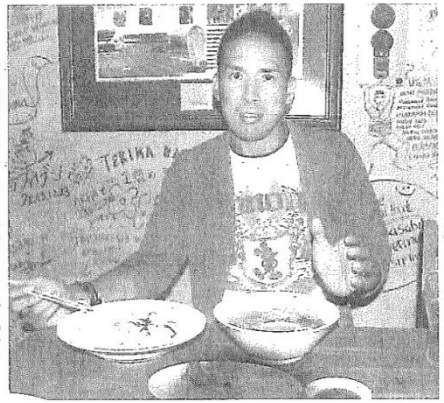
熱狂する国柄が垣間見えると同時に、そこで戦おうとする覚悟を感じさせる。とはいえ、国内ではクリケットの知名度は低い。

「日本では野球があるから、クリケットはなかなか普及しない。クリケットは競技人口が世界2位だが、(日本では)誰も伝える人がいないから知らない。サポートしてくれる人がいないと成り立たないので、少しでも知ってもらうために努力している」

元プロ野球選手として注目され、日本クリケット界の期待を一身に背負う。普及に取り組む佐野市への思いや今後の目標は。

「僕のクリケットのスタート地点は佐野。冬の寒い1月に河川敷でスタートさせてもらった。そこで楽しい、もっとやりたいと思わせてもらえたのはすごくありがたい。クリケットは日本での競技人口は少ないが、日本人の代表として世界に羽ばたいていけるように頑張りたい」

(楠城泰介)



「38歳なので、いくらいけると言っても、あまり時間はない。どんどん攻めていきたい」と語る木村昇吾選手

■日光軒　佐野市若松町138。☎0283・22・7832。営業時間は午前11時半～午後2時15分、午後5時半～8時。木曜定休。